

**その2** 北ア・蝶ヶ岳 2677m (会個人山行)

◎令和元年5月6日(月)～7日(火)

◎C(L), B, A

新元号の奉祝ムード冷めやらぬ6日朝8時八王子出発、10連休最後の日とあり中央道下り車線はガラ空き状態、おまけにトラックが全然走ってないのでいつもと勝手の違う奇妙な高速道路、11:10沢渡着。ライダーハウス「ともしび」PAに入庫。丁度空いていた納屋のような建物の中に停めさせてもらう。上高地まではTaxi奮発(1人1400円)。

12:20上高地出発、1日目は雨の予報もあり気になっていたが、幸いに降られる事無く2時間弱で徳沢園に着き、濡れずにここまで入れホッと、各自マイテントの幕営作業にかかる。今日はこの山行に備えておニューの超軽量テントのお披露目である。

居住地の関係で、どうしても上信越方面へ出かける事が多くなり、アルプスには疎い私にとって蝶ヶ岳は初めての挑戦になる。実は丁度3年前の同時期にも計画があり、集合場所の八王子までは来たのだが、直前にヘマをしでかし一人寂しく帰路に付くというドジがあつて、この山に寄せる思いは複雑、お二人の手前、もう失敗は許されないのである。

一段落した後、徳沢園の小屋に入り缶ビールで小宴会を始めたが、3時半頃より雨が降り出した。予報通りであり、それが正しければ夜中には前線が抜けていき、明日は晴れるはずと己に都合良く解釈し、ビールを啣るが、雨足は次第に勢いを増し嫌な予感がしてきた。

各自マイテントで夕食済ませ、6時過ぎには寝袋に潜り込んだが、嫌な予感は適中、10時頃には風雨強まり、耳元でフライシートを叩くパシッ!パシッ!という雨音が煩くて寝ていられなくなる。春の嵐に見舞われて煽られ揺れるテント、張り綱が緩むのではと気になるが、吹き募る雨の中、外へ出ていく勇気は無くただじっと耐えるのみだ。3年前のアメリカ・レーニア山ハイキャンプを思いだしたが、あの時が大関クラスなら、今日はせいぜい幕内程度、大丈夫と思うしかない。

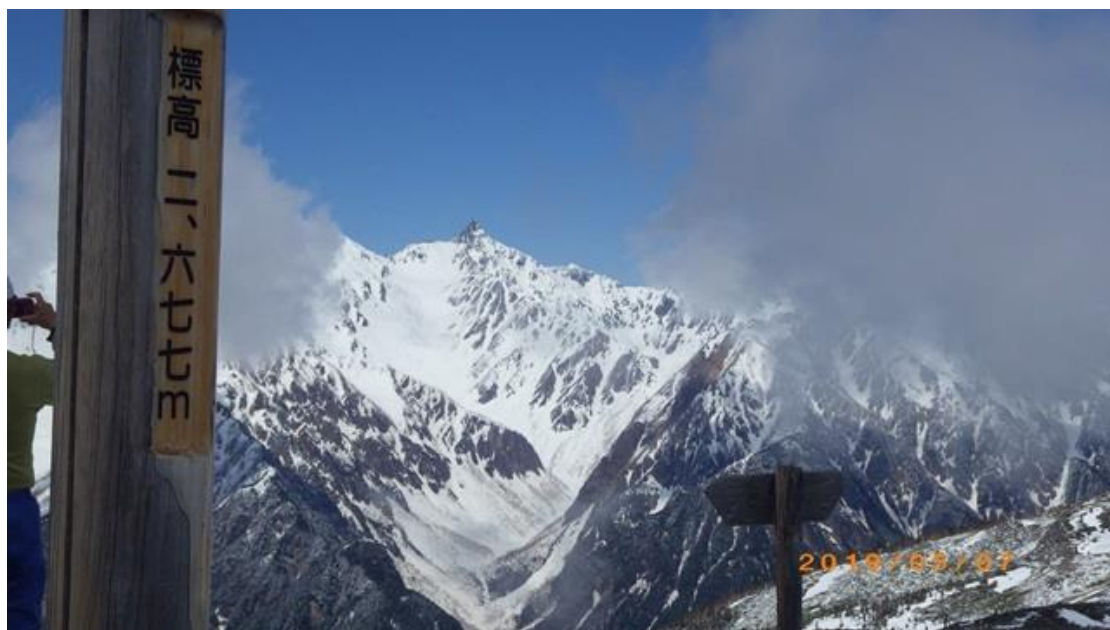
7日、3:30起床。星も出ていて天気は良くなりそうだ。フライシートに付着した雨粒は凍り付き、やはり寒い。コーヒーを沸かし軽く朝食を摂る。目の前の明神岳氷壁のモルゲンロートを拝みたかったが、生憎頂上はガスに覆われてシャッターチャンス訪れず、残念。



5:00 最低限の荷物にて出発。出だしからコメツガやカラマツ等の樹林帯の急坂で、息があがる。歩き出してすぐ雪道となり、ガチガチに凍っているが、しばらくはノーアイゼンで頑張り、1980m 地点にて 12 本爪を着ける。ここも例年より雪は多いようで、段差の続く急坂はグングン標高を稼げるのだが、その代償はきつく、歩き難いし幾度となく立ち止まりハーハー、ゼーゼーと呼吸を整える。踏み跡があり、ラッセルの必要ないのがせめてもの慰めと云えるが、樹林帯の中、折角の槍・穂がみえないのは、いかにもマイナス、そこが当コース最大の弱点に違いない。

途中ボツボツと前夜蝶ヶ岳ヒュッテに泊まった下山者と会う。単独行の男性は「昨夜は荒れたけど夜中から良い天気になり今朝はもう最高！！でした」と満面の笑みを浮かべいかにも誇らしげで、こちらはちょっぴり羨ましい思い。

9:10 長堀山頂上に出たが標識はまだ雪に埋もれている。ここでいつになく調子の上がらない B さんから様子を見るので、先へ行くよう促される。骨盤がズレて股関節運動でさらに痛めたという。途中、氷りつく「妖精の池」を右手にみて、10:10 待望の蝶ヶ岳頂上に立つ。途中、3 組程に抜かれたが、もう小屋に入ったのか誰もいない C さんと 2 人だけの頂上だ。残念ながら槍も穂高も流れるガスに隠れ、時折切れ間をぬってチョコッと顔を見せてくれるだけだが、その迫力ある展望は予想外で改めてこの山を見直してしまった。



こちら側から見る槍・穂高はなかなかのもの、先程「今朝は最高でした！！」と自慢されたのも無くなるかなで、納得する。5 分程で遅れていた B さんも到着、途中の苦労が報われる展望、それが蝶ヶ岳である事は実感出来たので、もし次があるならその時は必ず頂上で泊まる事にしようと思い帰路に着いた。

ちなみにマッターホルン北壁日本人初登攀の芳野満彦氏は若い頃徳沢園で冬の間約半年たった一人で小屋番していたが、彼は「長野県にはいっぱいよい山があるが、皆から見落とされている長堀山が好きで、心からこの山を愛している」という<「山靴の音」(二見書房)>。70 年前は長堀山からの展望も良かったらしい。

撤収し、戻る。徳沢も河童橋も好天で、明神、穂高が美しい。



《コースタイム》

徳沢 5 : 00 ~ 10 : 10 蝶ヶ岳 10 : 35 ~ 13 : 35 徳沢

(了)